

●書 評

馬場毅編

近代日中関係史の中の
アジア主義

——東亜同文会・東亜同文書院を中心に

あるむ／2017年3月／176頁／2500円＋税



藤谷浩悦

近年、アジア主義に関する著書、論考が数多く現れている。アジア主義は、欧米のアジア進出に対して、アジアの仮想的な文化的、地縁的同質性を根拠に（同文、同種）、アジアの連帯と抵抗を説いたものである。しかし、この論理では、アジアはあるがままのアジアではなく、「近代」性の構築を目指した改革や改造が前提となった。このため、アジア主義ではアジアの連帯と共に、アジア諸国の改革や改造が必要となり、前者がアジアを向いているとすれば、後者が欧米をモデルとするという、二つの方向性を同時に併存させた。日本はこの入り組んだ構造の中で、他のアジア諸国に先駆けて「近代」性を構築したという理由によって、優位性を誇示する形になっていた。そして、日本が他のアジア諸国を指導して「近代」性の構築を助け、アジアの連帯をなし遂げるという、日本の東洋盟主論もこのアジア主義から生まれた。このことは、アジア主義が日本のアジア侵

略と結び付く結果ともなった。ただし、近年の研究の特徴的な事柄は、これまでのようにアジア主義を結果から過去に溯り、原因を探索しようとするだけではなく、日本のアジア主義が歴史の営みの中でどのように形成され、いかに展開して人々に働き掛けたのかを実証的に考察する点にある。

このようなアジア主義をめぐる論点は、多岐にわたる。一九世紀後半以降、日本ではアジア主義を表すものとして「振亜」や「興亜」の語が用いられ、振亜会、興亜会、亜細亜協会が設立された。ただし、「振亜」や「興亜」の主体には、日本が位置付けられた。このため、アジア主義は、日本が幕末に「開国」して以降、国際情勢の中に参入する中で、自らの立ち位置を確認し、方向性を見定めるための、自己認識のあり様の一つでもあったといえよう。そして、一部の日本人は、日本が欧米のアジア進出に対抗して、他のアジア諸国を指導し、「近代」性の構築を助け、かつアジアの連帯を図る点に、自らの立ち位置を定め

た。しかし、他国の指導は他国への干渉と裏腹の關係に立ち、他国への干渉は武力を用いた強制、更には侵略に転ずる可能性を秘めた。欧米の強者に対するアジアの抵抗及び連帯が、アジアの内部で強者と弱者の關係を生み出し、これらアジア間の対立が欧米との間で別の關係をもたらし、更なる抵抗を生み出す契機ともなった。このため、アジア主義を考えようとするならば、アジア主義の思想的理念と共に、アジア主義が実践され、展開した場合に潜む陥穽、更には当為と実態の乖離、理念と現実の食い違いにも関心が向けられる必要がある。

アジア主義をめぐる問題は、戦争と正義など、戦争の意図を被う様々な論理と関連付けても説かれる。戦争は、領土や利権への剥き出しの欲望だけでなく、何らかの正義を伴って遂行される。近代の戦争は、「国民国家」では勢い「総力戦」となる。そして、全国民を戦争に動員するためには、必ずや正義が必要とされる。戦争が正義と正義の戦いとなる所以である。このため、戦争では、国民に

正義を浸透させるため、様々な仕掛けが用意される。近年の研究が着目しているのは、この仕掛けの読み解きである。アジア主義の、日本が盟主となり、欧米の影響を排して、アジアの覚醒を図り、アジアに政治的、経済的な自立体制を構築するといった観念は、一九三八年の日本政府による東亜新秩序宣言など、日本のアジア政策、日中戦争の遂行などと密接な關係を持っただけでなく、日本の国民に強くアピールした。しかし、この結末は、日本の敗戦と共に、アジアの民衆に甚大な被害を与えて終わった。

アジア主義に関する研究が近年、盛んになった理由は、二〇世紀に達成した国際關係が大きく動揺する中で、多くの研究者がアジア主義の本来備えたであろう「思想的可能性」に着目し、アジア主義が「二十一世紀の我々が直面する問題に、さまざまなヒントを与えてくれる存在である」と見なしているからでもある（中島岳志『アジア主義——西郷隆盛から石原莞爾へ』潮出版社、二〇一七年、三五頁）。このため、近年の研究で

は、歴史的事象を単に敵対と友好或いは侵略と聯盟などの二項対立で考えるのではなく、友好の中に潜む敵対、聯盟の中に潜む侵略の芽、或いはこの逆のケースなど、より複雑で、重層的な関係に着目し、個々の事例の実証的分析から全体へと敷衍し、読み解こうとする姿勢が顕著に表れている。近年の歴史研究は、中国の事情に通じたいわゆる「支那通」が、日本の中国侵略の先導者となった場合の研究など、イデオロギーや理論をかざした硬質の議論よりも、個々の場合に即した、細やかな出来事から掘り下げ、更に敷衍させて考える特徴を持つ。

本書は二〇一二年度から二〇一六年度にかけて、愛知大学東亜同文書院大学記念センターで、文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業として、主テーマ「東亜同文書院を軸とした近代日中関係史の新たな構築」を中心に行われた共同研究の中の、「近代日中関係の再検討」グループの研究成果である。愛知大学は、一八九八年の東亜同文会、更には一九〇〇年の南京同文書院をへて、一九

〇一年に上海に設立された東亜同文書院を前身に持つ。このため、同テーマは、同大学が二一世紀に向けて、同大学の歴史を振り返りつつ、アイデンティティを探る意味でも、大きな意味を持っているように思われる。同大学の「近代日中関係の再検討」グループは、この点について内外の研究者を交えて討論を重ね、着実に研究成果を挙げてきた。これらの重厚な研究成果は、今後の研究の進展に大きく寄与するものであろう。何よりも、敬意を表したい部分である。同グループがこれまで行ってきた、愛知大学における国際シンポジウムやワークショップの内容と成果は、以下の通りである。

「近代台湾の経済社会の変遷——日本とのかわりをめぐって」（国際シンポジウム、二〇一二年八月四日、五日）

「東亜同文会・東亜同文書院と日中関係史の再検討」（国際シンポジウム、二〇一三年二月一日）

「東亜同文会・東亜同文書院と日中関係史の再検討」（ワークショップ、

二〇一五年一月一七日）

「近代日中関係史の中のアジア主義——東亜同文書院と東亜同文会」（国際シンポジウム、二〇一五年二月六日）

「近代中国社会と日中関係」（国際シンポジウム、二〇一六年九月九日、一日）

本書は、このうち、二〇一五年二月六日に愛知大学豊橋校舎で行われた国際シンポジウムの内容に、栗田尚弥（沖縄東アジア研究センター主任研究員、國學院大學文学部講師）、許雪姬（台湾・中央研究院台湾史研究所研究員）の報告を交えて、成立したものである。

次に、本書の内容を紹介する。

序説 馬場毅

第一章「日本と「興亜」の間——近衛篤磨と東亜同文会の「支那保全」を巡って」栗田尚弥

第二章「東亜同文会のアジア主義について」馬場毅

第三章「宮崎滔天と孫文の広州非常政

府における対日外交——何天炯より
宮崎滔天への書簡を中心に」李長莉
(佃隆一郎訳)

第四章「孫文支援者・山田純三郎の革命派への関与とその実態について——一九二〇年代、革命派の広東省の資源開発を目指す動きを中心に」
武井義和

第五章「東亜同文書院中の台湾籍学生と林如堦、吳逸民両人の戦後の白色テロ体験」許雪姬(朝田紀子訳)
第六章「東亜同文書院の「復活」問題と霞山会」堀田幸裕
おわりに

二

本書の序説では、各章の内容が丁寧に紹介されている。このため、以下においては、簡単に各章の概要のみを記す。

序説は、愛知大学の「東亜同文書院を軸とした近代日中関係史の新たな構築」を主テーマとして行われた共同研究の中の「近代日中関係の再検討」グループの狙いを述べ、アジア主義について、竹内

好や野原四郎の所論を参考にしつつ、「西洋の侵略に対して、日本が盟主となり、アジアは連合してそれに対抗していく」という思想、および運動」と定義した上で、東亜同文会及び東亜同文書院の成り立ち、特徴を述べ、更に日本や中国の輿論を喚起するために発刊された新聞や雑誌に言及しつつ、本書に収録された各論文の内容を紹介した。

第一章の栗田尚弥論文は、近衛篤磨の思想と行動、東亜同文会の性格について、これらと「支那保全」論との関係を中心に考察した。近衛篤磨は日清戦争後の輿論の驕慢化及び「支那分割」論の隆盛に対して、同人種同盟論の立場から反対し、「支那保全」を主張し、東亜同文会の発会においても、これを四項目の綱領の筆頭に置いた。そして、東亜同文会は当初、中国の政治に関与せず、「文化事業重点主義」を取ったが、次第に体制内「興亜」団体に変貌を遂げ、本来の「興亜」の理念と日本政府の「文化侵略」の矛盾にさらされたとする。

第二章の馬場毅論文は、東亜同文会の

綱領、「支那保全」に含まれた内容の変質を、東亜同文会の活動の変化に考察を加え、東亜同文会の活動を動態的に描いた。この結果、「支那保全」論は、欧米の中国分割に反対しながらも、日本の影響力や権益を拡大する性格の強いものと結論付ける。ただし、東亜同文会及び関係者は、義和団事件期と辛亥革命の動乱期に中国の政治に深く関与し、第一次世界大戦中も中国への積極的な権益拡大を図ったが、同大戦の終結前後には、「支那保全」を前提とした経済的相互関係、すなわち「日中共存論」に基軸を移したとする。

第三章の李長莉論文は、孫文の秘書の何天炯が宮崎滔天に送った、これまで未公開の郵便書簡の分析を通じて、何天炯を通じて孫文と宮崎滔天の関係、晩年の宮崎滔天の思想と行動に考察を加え、併せて孫文の日本政府に対する外交交渉に言及した。そして、孫文は、一九二〇年十一月、広州に帰還し軍政府を掌握すると、宮崎滔天、萱野長知を通じて、日本の政財界の支援を要請したが、一九二

一年六月から七月にかけて、日本の汽船「小川丸」による広西派軍閥への武器援助が判明すると、対日外交姿勢を変化させて、ソ連やアメリカに近づいたとする。

第四章の武井義和論文は、一九二〇年代、山田純三郎が広東省の翁源水電開発計画及び含油頁岩の開発計画に果たした役割に分析を加えた。翁源水電開発計画と含油頁岩開発計画は、日本からの投資を呼び込むため、後藤新平や渋沢栄一など、日本の企業家に様々な工作が行われたが、成果がなかった。ところが、山田純三郎は、孫文から委嘱され、日中の平等な立場で同計画を推進し、仮契約草案を作成する段階まで進めた。山田純三郎の計画は、自己の利益より日中関係を優先させるものであったが、一九二五年の孫文の死去で立ち消えとなったとする。

第五章の許雪姬論文は、一九四〇年から一九四五年まで、「日本人」として東亜同文書院に学んだ台湾人学生の数、入学の動機と卒業後の経歴、一九四五年の日本の敗戦で中華民國の国籍を「回復」

した後、これらの学生の遭遇した境遇、及び白色テロにあり、収監され死刑に処せられた場合の理由、経緯などに分析を加えた。そして、台湾人学生で中国、東南アジアに赴いた者は、日本の敗戦と共に身体への迫害、財産の没収、生命の危険に直面し、かろうじて困難を乗り越え台湾に戻った場合でも、就職難、修学難に苦しんだ。また、卒業生の中には、林如埏、吳逸民の例のように、白色テロにあり、死刑を執行されたり、投獄されたりする者もいた。

第六章の堀田幸裕論文は、一九四六年の東亜同文会の解散後、霞山会、愛知大学、滬友会（東亜同文書院の卒業生の組織）の三者の関係を整理し、滬友会による東亜同文書院の「復活」問題に考察を加えた。そして、滬友会の東亜研修所の設立、霞山会の中国語講習会の実施をへて、一九六七年に東亜学院が設立され、東亜同文書院大学の継承が図られた。しかし、東亜学院は霞山会事務局との齟齬、中国に対するイデオロギーの評価をめぐり、内部対立を抱えていた上に、資

金計画の甘さ、経営面の問題、政治状況、卒業生の就職難などから経営難に陥り、一九七五年に閉鎖されたとする。

三

本書は、中国、台湾、日本の各研究者が「近代日中関係史の中のアジア主義」という共通のテーマの下に、各々の関心に従って論文をまとめ、これらを時系列に配列する形になっている。このため、本書は、各研究者に共通テーマに沿った分析を委ねており、全体的には統一が取れていない印象を受ける。ただし、これも、これまで何回か開催されてきた国際シンポジウム、ワークショップの成果の積み重ねがあつての事であると思われる。このため、本書は、同大学の「近代日中関係の再検討」グループが刊行した一連の著書と合わせて、読まれるべきものと考え。この点において、これまで本企画に携わってきた関係各位に何よりの敬意を表したい。個々の論文は、斬新な視点からの、綿密な史料分析、実証に基づく、個性的かつ優れた論文が揃って

いる。以下、評者の関心に沿って、本書の論評を行いたい。

第一章の栗田論文も第二章の馬場論文も、東亜同文会の理念や活動を動態的に描いた力作である。特に、栗田論文は、近衛篤磨について「支那保全」の理念を抱いた理想主義者と共に、現実主義に立脚した政治家として捉え、一九〇五年の日露戦争の終結以降、一九一七年の大隈重信内閣による二一カ条要求までを、「第二の黄金の一〇年」と見なしている。また、馬場論文は、東亜同文会の「支那保全」の内包する多様な要素に着目し、東アジアの国際情勢、時代状況の変化と共に、「支那保全」の内実が変化し、第一次世界大戦後に経済的相互関係、すなわち「日中共存論」が台頭する様を描いている。歴史研究が、個々の歴史的事象の多様な側面に着目し、様々な可能性を模索するものであれば、これらの指摘は重要な意味を持つ。

根津一が一九〇九年に、「日本が力で、支那の微弱なるものを助けて維持して

やるぞ」と受け止められることを懸念して、「支那保全」の語を削除させた点は、栗田論文も馬場論文も指摘している（本書四五頁、六一頁）。この点に関連して、井上雅二日記に次の興味深い記述がある。一八九六年七月三〇日、井上雅二は白岩龍平などと上海から蘇州に入ると、大勢の民衆が「東洋人新に中国に勝ち、傲然国旗を翻して茲に至る。可憎々々」と罵倒した。この後、井上雅二は八月八日に上海を出立、日本に帰国後、郷里の丹波篠山に戻り、八月二十九日に京都・若王子山中の根津一を訪れ、蘇州での体験を語った。すると、根津一は、白岩龍平の粗忽を批判し、中国では民情に注意を払うべきだが、方法次第では利益になるとして、「大東新利洋行と称す、名已に営利に不可あり。商業は営利事業なれば仮りに新勝国の余成に身を借るべからず。可成清人の氣を察して、之れを行はざるべからず」と述べたという。

根津一はこれに続けて、井上雅二に次のように論じている。「近時書生輕燥に

ならざれば情弱、徒に時事を論ずるを知るのみ。宜しく君に於ては啓明（に）学を講じ、意見を立つべし。世人は我國変遷の過急なるを見て、支那の滅亡を即断するものありと雖も、彼れ広漠、豈に暴力に祠を絶つものならんや。宜しく今に及んで切磋する処なかるべからず。且つ清国たる上下七千戴徳あるも、取て伐るべきなりと雖も、其の基礎は畢く今に至る、歴然一大独立国たり。其社会の進歩せる、豈に泰西に譲らんや。只た規綱の弛廢せるのみ。若し一大改革を行はゞ、果然大強国と為る、并し掌を返すが如し。君之れを諒せよ」と。すなわち、根津一は中国を、「其社会の進歩せる、豈に泰西に譲らんや」と述べて、「若し一大改革を行はゞ、果然大強国と為る」と捉え、井上雅二に刻苦勉勵を説いた（拙著『戊戌政変の衝撃と日本——日中聯盟論の模索と展開』研文出版、二〇一五年、三〇八頁）。この点にも、根津一の特徴が表れる。

栗田論文は、これまでの東亜同文会関係の雑誌に記載された論文、『近衛篤磨

日記』などに記載された書簡、及び同僚、門弟の回顧録などに関する、詳細な研究成果の下に立つて、纏められたものである。特に、同論文では、近衛篤磨が荒尾精などと同様に、日清戦争後の日本の軽薄な風潮を批判し、東亜同文書院を中国政治に関与せず、「文化事業重点主義」の方針に沿って運営したとするなど、新たな視点から問題提起を行っている。ただし、同論文では、ダグラス・レイノルズが一八九五年から一九〇五年までを、日中関係の「黄金の一〇年間」と捉えたのに擬えて、一九〇五年から一九一七年までを「第二の黄金の一〇年」と見なしている。日中関係はどの部分に光を当てたのかで見方が異なるが、評者が主な研究対象とする湖南省に限れば、同時期こそ省内の反日感情が強まった時期であつたように思われる。

第三章の李論文と第四章の武井論文は、宮崎滔天と山田純三郎の事跡について、未公開史料の分析を通じて明らかにしたものである。宮崎滔天は晩年、堀才吉（法号悉陀羅）の開いた新宗教・大宇

宙教に帰依し、居士号を大活とし、一九二二年一月六日に腎臓病に尿毒症を併発して、療養中のまま病没した。このため、宮崎滔天の研究も、晩年に関するものは少ない。また、山田良政及び山田純三郎も、自身について語ることが少なかったため、研究の進捗も遅れた。しかし、山田純三郎は、日本人の中で、孫文の臨終に立ち合い、死に水を取ることを許された唯一の人物である。李論文は、宮崎滔天の子孫、何天炯の子孫が所蔵していた、これまで未公開の何天炯から宮崎滔天にあてた郵便書簡を分析したものである。また、武井論文は、山田家から愛知大学に寄贈された山田家の史料、及び外務省文書などを下に、山田純三郎が孫文のために行った事業を跡付けている。今後は、これらの研究も、未公開史料の発掘、調査、分析を通じて、大きな進展をみることであろう。

第五章の許論文と第六章の堀田論文も、これまで明らかにされなかった東亜同文書院の台湾籍学生の境遇、及び東亜同文会及び東亜同文書院の戦後に関する

研究である。これまで、前者の実態、特に卒業後の進路、日本敗戦後の境遇については、武井義和の研究「東亜同文書院で学んだ台湾人学生について」（馬場毅・許雪姬・謝国興・黄英哲編『近代台湾の经济社会変遷——日本とのかかわりをめぐって』東方書店、二〇一三年）がある。許論文は、自身が台湾で行った聞き取り調査などを下に詳細な分析を行ったもので、武井義和の先行研究の不十分な点を補いつつ、新たな視点を打ち出している。オーラル・ヒストリー或いは当事者の回顧録という面では、堀田論文も同様の意義を持つ。東亜同文会及び東亜同文書院の戦後については、霞山会、愛知大学、滬友会が入り組み、立場の違いによって様々な見方がなされ、評者など部外者にはわからないことも多い。一九四五年の日本の敗戦から、ほぼ七〇年がたつ。このような地道な研究は、今後一層必要となるであろう。

これまで、留日学生の研究においては、留日学生の日本での生活や実態についての研究が主となり、卒業後の進路、

社会に対する貢献などについては、あまり重点が充てられてこなかった。留日学生の卒業後の進路は、留日学生の間窓会などが結成されない限り、追跡調査は難しいからである。しかし、中国や台湾における「近代」性の構築に着目するならば、これら東亜同文書院の卒業生が卒業後に政治家や官僚や知識人としてどのような立場につき、政治や社会、文化の構造、知的枠組みの変化に指導的な役割を果たし、これらの変質を促したのかは、重要なテーマとなるであろう。この点の重要性は、東亜同文書院に限らず、他の大学や実業学校でも当てはまる事柄である。

四

以下、簡単に、本書全体の課題について、今後のアジア主義研究の可能性を踏まえながら指摘する。

本書のタイトルは、「近代日中関係史の中のアジア主義——東亜同文会・東亜同文書院を中心に」である。この場合、日本のアジア主義が中国でどのように受

け止められたのかは、興味深い問題になる。アジア主義はアジアとの連帯を説きながら、中国では大きな影響力を持たなかったともされる。それでは、日本のアジア主義は、アジア諸国のナショナリズムといかなる関係に立ち、更には日清戦争後の社会風潮の中にどのように位置付けられるのであろうか。本アジア主義が日本の東洋盟主論を内包する限り、双方の関係は対等ではない。また、日本の東洋盟主論は、日清戦争後の社会風潮、すなわちアジアを軽侮する風潮とも無縁ではない。中国の知識人がアジア主義を称えた場合、アジア主義は人種を超越した世界主義に立脚し、日本のアジア侵略を批判する形で展開した（嵯峨隆『アジア主義と近代日中の思想的交錯』慶應義塾大学出版会、二〇一六年、一三六頁）。本書で惜しまれるとすれば、日本のアジア主義について、第三章の李論文以外、中国史の側から、特に中国の政治家、知識人、民衆の視点の側からの視点を欠いた点にある。今後の課題といえよう。

アジア主義は、主唱者の立場によつ

て、多様な意味を持つてきた。このため、アジア主義を考える際、中国の政治家や知識人、民衆が日本のアジア主義に何を感じ、どのように反応したのかという点と共に、個々の言説に含まれる内実、すなわちアジア主義を称えることで何が図られているのかは、極めて重要な点になると思われる。東亜同文会・東亜同文書院が日本のアジア主義の流れの中でどのように位置付けられ、いかなる変貌を遂げたのかは、近衛篤磨や根津一が同会や同書院に果たした役割も含めて、従来から何度も論じられている。この場合、同会や同書院の源流の一つとして、荒尾精の日清貿易研究所、興亜会、亜細亜協会、更に前身の東亜会と同文会が考えられてきた。本書、特に第一章の栗田論文、第二章の馬場論文では、日本のアジア主義の展開における同会や同書院の位置付けが丁寧に跡付けられている。ただし、アジア主義や同会、同書院の可能性を考えた場合、これらアジア主義を自由民権運動など、同時代の全体的な思潮との関係において分析する視点も必要に

なる。この点で、アジア主義が日本の中で持った意味について、物足りなさを感じた。

近年の研究が注目するのは、日清戦争後の東アジアにおける国際関係の変容及び東アジア各国の変革の「共時性」である（古結諒子『日清戦争における日本外交——東アジアをめぐる国際関係の変容』名古屋大学出版会、二〇一六年、一七二頁）。この見解は、一八九七年に李氏朝鮮が国号を「大韓帝国」と改称し、一八九八年に独立協会が万民共同会を開催し、同年に清朝で戊戌変法が起きて日中聯盟論が説かれ、更に日本で隈板内閣（首相兼外務大臣大隈重信、内務大臣板垣退助）が成立したことに、東アジアにおける一八九八年を画期とした「共時性」を見出すものでもある。そして、中国・中山大学教授の桑兵は、東アジアの近代史の中で、一八九八年に日中関係が大きく変質した点を強調し、上海亜細亜協会の設立に大きな意義を見出し、かつ上海亜細亜協会を東亜同文会の先駆的形態に位置付けている（桑兵『交流與對抗

——近代中日関係史論』広西師範大学出版社、二〇一五年、六八頁）。このように見た場合、日清戦争後に東アジアにおける国際関係が動態的な変容を遂げる中で、東亜同文会が一八九八年に設立されたことには、大きな意味があったことになる。

既に指摘したように、近年、アジア主義に関する研究は盛んである。これまでも、アジア主義は、ややもすれば日本のアジア侵略との関連で考察され、東亜同文会や東亜同文書院についてもこのアジア主義との関連で議論され、多くの功績をあげてきた。ただし、このような観点からだけでは、アジア主義の可能性、東亜同文会や東亜同文書院の意義は等閑視されることになる。特に、東亜同文会、東亜同文書院の関係者は、これ以前に設立された興亜会、亜細亜協会、東邦協会の会員だけでなく、自由民権運動の参加者とも重なり合うし、日清戦争に前後して、中国の知識人、改革派や革命派の人士と交流を持ち、彼らに強い影響を与えた。今後は、これらの諸点を踏まえつ

つ、一九世紀後半から二〇世紀にかけた東アジア全体を視点にいった、多様な動態的な展開が考察の対象となるであろう。この意味において、本書は誠に時宜に適っているだけでなく、多くの啓示を我々に与えている。

本書が日本史や中国史の多くの研究者に読まれ、今後の研究の指標となることを祈念するものである。